

若手夏の学校の始まりとその前後

大沢文夫

愛知工業大学

若手生物物理夏の学校第1回は1960年夏、志賀高原で開かれた。同じ年の12月に生物物理学会がスタートしたからそれに先立っての若手の学校の開催であった。新しい学問分野に新しい学会を作るには、若手のもり上がりが何よりも大切であると思われた。ひるは若手の研究発表、よるは若手、古手入りまじってのどういう学会を作るかの議論が白熱した。その後、毎年夏の学校が開かれている。はじめは若手同士の研究発表と討論が主であった。各地の若手グループにそれぞれ宿題を出しておくこともあった。先生を招いて講義やセミナーをということはあまりなかったと思う。現在はずいぶん学校のスタイルが変わったようである。

われわれは1950年に20代のメンバーばかりで名大物理K研として活動し始めた。コロイド物理から高分子物理、そして対象を生物現象へ、特に生物運動、筋肉収縮の分子論へ移すことにして準備にかかり、1954年に筋肉蛋白質アクチンの研究を開始した。このころの状況を"この指とまれ"という形で若手の研究グループが生まれ、テーマが決まったと表現した人がある。当たっているかもしれない。いまでも全国各地でこういう感じで若手グループが生まれているだろうか。よくわからないが、戦争が終わってまもなくのあのころは上にいる"先生"たちが少なくていい時代だったという人は多い。

しかるべき設備、装置も低温室も超遠心機もないままアクチンのG-F変換の研究を始めて、アクチンの抽出精製から各種測定をやみくもにつづけた。めどがついたのは2年後、フルペーパーが出たのは5年後であった。そこでG-F変換を"状態論"として明確に記述することができた。動的平衡、相転移、ゆきき、サイクルなどのことばがでてくる。実験の途中、まわりには、まるで生物学、生化学のようでどこに物理があるのかなどという声もあった。われわれは何も気にしなかった。でき上がったのはいかにも"物理的"考え方がしみこんだものであった。国内外の研究者達にはとても新鮮に映ったようである。

以上思い出のいろいろ。若手のみなさんに期待をこめて。